

ある日突然恋人が出来た。

「好きです」

嘘だ。僕が僕なら僕のことには絶対に好きにならない。

沙村広明の「ハルシオン・ランチ」を渋谷ツタヤで買った帰り、なんとなく携帯を開いたら「同じ学科の干菓子森です」という題名と、本文一行で前文のようなメールが届いていた。彼女の名前は干菓子森甘。

干菓子森甘と書いてヒガシモリ・カンと読む、同じ学年同じ学科でありながら、特にこれといって同じ授業を受けることもない、浪人を経験した僕より一つ年下の金髪ショートの子。

僕が彼女について知っていることはそれ以上でもそれ以下でもない。いや、もしかしたら座席が離れているだけで案外同じ授業を受けていたのかもしれない。だから「それ以上でもそれ以下でもない」と言ったがつまりは「それ以下」だ。僕のメールアドレスを何で知ってるんだ？ そういえば入学時のオリエンテーションで、赤外線交換をした？ ような？

もう一通入っていた。今度の題名は無い。

「私のことは好きですか？」

僕は彼女のことなど何も知らない。

「好きです」

送った。

彼女のことを知っているか知ってないかなんて関係ない。

事実、既に僕は彼女のことを、甘のことが好きになっていた。

この日、僕に生まれて初めての彼女が出来た。

D
J
テ
ル
ミ
ン
の
ハ
ル
シ
オ
ン
・
ラ
ン
チ

D
J
テ
ク
ノ
ウ
チ
著

ナガタカズオ

僕の名前は南方数夫、工業系大学に所属する大学一年生、一浪をして
いるので今年で二十歳だ。

突然だけど、あなたは「DJテルミン」を知っているか？ごめん、知
ってるわけがないよね。

「DJテルミン」は僕ら姉弟による二人組のテクノユニットだ。僕は
そのトラック・メーカー兼DJ兼その他もろもろ、というか殆ど全てを
やっている。

ナガタテルミ

ユニットの相方でもある姉の名前は南方輝美、学生数一万を超える総

合系マンモス大学の二年生、今年で幾つだっけ？二つ上だから今二十一か二十二ぐらいだ。悪いけど僕はテルミの誕生日なんて知らない。

テルミは身長が高い、足も長い、髪も長い、モデル体型？姉弟だからたまにわからなくなるけど、まあ美人だよね、どう考えても。だからDJテルミンのフロント・アクトはテルミだ。

大事なことだからもう一度説明しよう。DJテルミンはDJもやったりライブもしたりする二人組のテクノユニットだ。テルミは長い髪を振り乱し、ディスプレイシヨンのかかったメガホンを片手にギャーギャーと叫ぶ、僕はというと、横で下を向いてせっせとマックでシーケンスを弄

ったり、DJをしたり、姉がDJをしてる振りを手伝ったり、姉が倒した他のバンドのマイクスタンドを立て直したり、まあとにかく全部やっている。

悔しいけど「DJテルミン」のネーミングの由来なんて言うまでもない。

今、「悔しいけど」って言ったか？だがDJテルミンの名前も、このコンセプトも、全部僕が言い出し、僕が考えたことだ。曲も、DJも、

全部テルミがやったことにしているし、パフォーマンスの方法もテルミが好きなようにしている。しかし、将来「DJテルミン」が少しでも金を産むようになったら、それは全部僕のものだ。これが「DJテルミン」の契約事項の全てだ。

結成一年、悔しいけど「DJテルミン」はまだ一円の金も産み出していない、それどころか大抵は僕の持ち出しで、金は減り続ける一方だ。

おかしい、こんなつもりは無かったんだ。

でも今はDJテルミンなんてどうでもいい、それどころじゃないんだ。帰りのJRを二周ぐらいしながら僕は多分二百回ぐらいメールを見直した。

干菓子森甘ってあのヒガシモリ・カンだよな？顔は、いや、覚えてるよ、覚えてるよ、いくら何でも顔も覚えてないのに好きですとか言わないよ。

でもさでも、いきなり好きとか嫌いとか、絶対そういう距離感じゃなかったよねコレ。絶対おかしいよ。やっぱこれイタズラじゃないかな。ヤバイ、この疑念はヤバイ、考え出すと悪い方への考えが止まらなくな

る。

そんなイタズラするような娘だっけ？いや、違うよな。確かにちよつとハツチャけてる娘だったと思うけど、そういう悪ふざけをするような娘じゃなかった気がする。じゃあ誰かが甘の携帯をいじくって送ってる
とか？

なんか部室で悪い先輩とかが「え〜い！」みたいな？王様ゲームのバツゲームです？そんな感じ？いやいや、そんな確率ありえるか？

あやべ、っていうか今「甘」とか言っちゃった。心の中で呼び捨てしちゃった。

「甘」だって、、、「甘」だって、、

頭の中で干菓子森甘への呼び捨てがフィードバック98%ぐらいで
デイレイして、いつもなら対人恐怖にまで陥るのが当たり前のような僕
の猜疑心もなあなあに、あとはJRをひたすらグルングルン回るだけ回
って、適当に夕日がひっくり返って暗転して、夜になったから降りた。

途中何度か、「今直ぐ電話して『僕も愛してるよ!』」とか言ったほう
がいいのかな」とかのトンデモが頭を打ったけど、「っていうか電話番
号知らないしいや赤外線交換したから探せばあるのかいやいやいやで

も電車内だし迷惑だしっていうかそれ絶対気持ち悪いし」ということで即ボツった。出来る訳がない。

駅から家までの十五分、ここでボーリングの玉でも転がしたらさぞの加速度だのやろうやね。そういえばエントロピーの授業の図でこういう窪地グラフを見たことがあるような。とにかくそんな感じの急な坂を上ったり下ったりして家路についた。

道中頭の中は甘一色だ。自分でもなんか「童貞ってすげえな」って思っちゃうぐらい甘のことしか考えてなかった。

甘、甘、リピートし過ぎてJRを降りる頃には既に干菓子森甘の呼称

は僕の頭の中で完全に呼び捨てるの「甘」で定着していた。

電車がどうのとかそういう以前に僕に電話する勇氣は無かった。次善の策として追加メールぐらいは当然だと自分でも思うのだけれど、こういう時なんて送ればイイんだろう、っていうかいきなり好きですって甘も非常識だよ、いや、好きですの何が非常識なものか、ってかやばいやばいよめっちゃ好きだよ既に大好きだよあああの自販機コーラ・ゼロとコーラ・ゼロ・フリーってどう違うのどこまで絞れば気が済むの。結局何もしないままアパートの前まで着いた。表札「南方輝美・数夫」の上にマジックで書き足された「DJテルミン」を見ていたらやっぱり

もう今日は何も考えるのは辞めようし、明日大学に行って考えようしと大体そんなゼロ・フリーな結論に落ち着いたのでドアノブを開いた。

ガーンって言ってゴトン、ゴロゴロドボドボ、で、ギャハハハハみたいな高笑い。

半開きだったらしいドアを開けたら黒板消しトラップよろしく挟まっていたスミノフ・アイスが脳天に直撃して、床一面に敷いたゴムカーペットのの上に全く吸収されることなくドボドボとダラダラとその中身を広げていった。

六帖しかないワンルームにスネークヘッドっていう感じにぎちぎちにつまった男女五人がそれを見て高笑いをしていた。一番でかい声はテルミだ。

あの告白メールがイタズラだとしたら、そういうことをするのはこういう奴らだ。甘は、僕の甘は絶対にこいつらとは違う人種だ。スミノフ・ガンはむしろ僕にそういうプラスの考えを与えたもうた気がする。

「これ、テルミが拭けよ、マジで。」

「カズオ君マジごめん！俺拭くから今拭くから！」

頭左半分を完全に剃ってそこにVaticanaってタトゥーがバッチリ描

かれてるんだけど意外と喋ってみるとイイ人のシズオさんが笑いながらトイレットペーパーで拭き始めた。バチカンってあのバチカン？

勿論この人もスミノフ・ガーンをトイレットペーパーをロールで準備して待ち構えてた訳だし全然同罪だ。別に痛くはないけど頭をさすりながら別に知りたくもないけど聞いてみた。

「今日は、呑んでんの？それとも非合法な方？」

「合法合法！」とテルミ、続いてシズオさん、

「いや多分テルミのそれ去年ぐらいから駄目になったやつだよ。」

どうでもいい、どっちだって一緒だ。つまり今日は非合法な会合だ。

テクノユニット「DJテルミン」は今、崩壊の危機を迎えている。

テルミは軽くジャンキーだ。